marcopolo

MARCO

1 マルコポーロ
JAN.1995/500YEN

総力特集 日本に言論の自由はないのか!

アンタッチャブル事件史。

辰吉丈一郎を潰したのは誰だ!

三浦知良 独占インタビュー3時間。

中森明菜激白!

大アンケート!戦後生れ300人が選んだ

わが青春の、洋画ベスト100。

MARCO

marcopolo

1 JANUARY 1995
CONTENTS

内田有紀 モデル
model Yuki Uchida
ジャンルー・シーフ 表紙撮影
photograph by Jeanloup Sieff G.I.P. Tokyo
安野ともこ スタイリング
styling by Tomoko Yasuno
佐藤富太 ヘア＆メイク
hair and make-up by Tomita Sato

世紀の大発見！
世にも不思議な臨死体験。
ジェノバの天才浮世絵師は北斎の生まれかわりだった。

芸術には興味もなければ、絵心もないひとりのオリーブオイル製造の科学技術者だった男が、心臓発作で倒れ危篤状態に陥った。不思議な臨死体験をへて、生還してみると彼には尋常ではない芸術魂が宿っていた。そして、誰かに導かれるようにして、版画の世界に没頭していく。驚くべきことに彼には、二世紀前の日本の巨匠の技が備わっていた。

この話の主人公は、ジョヴァンニ・リグストロ・ベリオという七十歳になる男性である。

この不思議な話を聞きつけて、ジェノバから海岸沿いに北上したところにある、港町にあるリグストロ氏のアトリエを訪れてみた。

アトリエは裏通りに面した建物の一階にあった。一見、靴や家具の修理職人の工房のような雰囲気。広さにして十数平方メートルもあるかないかのアトリエには、資料や作品、版木や和紙などの材料がうず高く積み上げられていて、身動きもとれないほど。この穴蔵のようなアトリエで、彼はひとり朝から晩まで一日十四時間作品を作り続けていた。

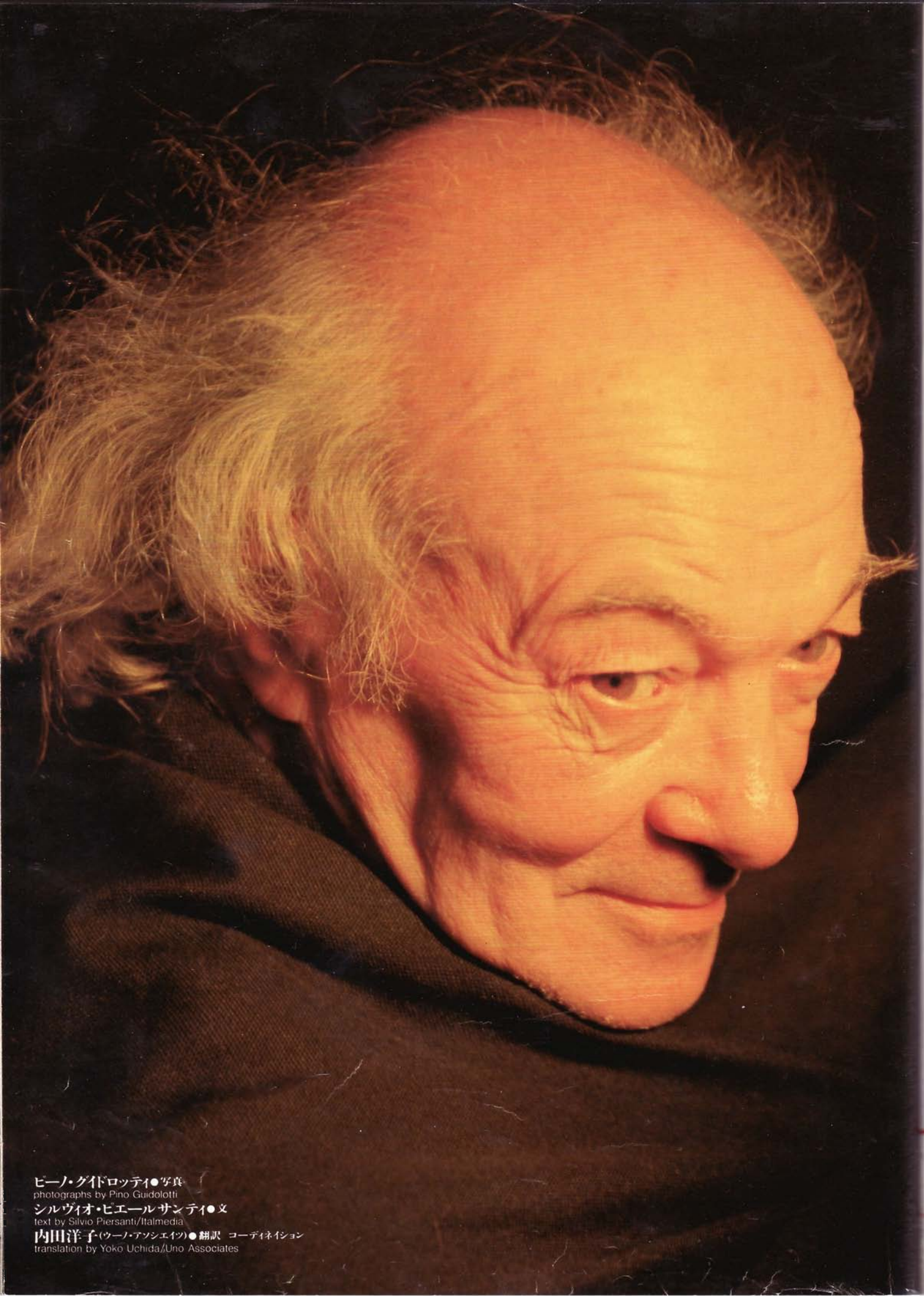
「今ではごらんの通り、美術書や資料が山とありますが、〈描かずにはいられない気分〉にとりつかれた当初は、私の周りには一冊の美術書もありませんでした。それでも絵を描き始めた最初の頃から、まるで誰かが私の手をとって、導いているような感じでした。私の中にいるその〈誰か〉にとって、私は道具の役割を果たしているという感じなのです。

心臓麻痺の危篤状態から意識が回復したとき、ペンを手にしたら、まるでプロの画家のように、いともたやすく素早く絵が次々と描けたのです。そばで見ていた医者や家族、友人は驚いてあっけにとられて……。でも一番びっくりしたのは、この私です。そのときまで、芸術というものがいったい何なのか考えたこともなかったのですから。〈時間の無駄〉でしかない美術館や教会巡りなんてまっぴらごめん、と思っていたくらいですからね。

戦争で思ったように学業も終えられず、心臓発作で倒れるまでの五十年間はただただ働くだけの人生でした。オリーブオイル製造の

どこか東洋人的な風貌のリグストロ氏。松本市の日本浮世絵博物館にある北斎の自画像（右下）と見比べてみると確かに似ている。

Kyodo Press

HOKUSAI
A Reincarnation in Genova

ピーノ・グイドロッティ●写真
photographs by Pino Guidolotti
シルヴィオ・ピエールサンティ●文
text by Silvio Piersanti/Italmedia
内田洋子(ウーノ・アソシエイツ)●翻訳 コーディネイション
translation by Yoko Uchida/Uno Associates

化学技術者として、私はイタリア中を隈なく回りました。ご存じのように、イタリアはどの街角もどの広場も一級の芸術作品でいっぱいです。ところが私はせっかく色んな芸術作品を目にする機会があったというのに、何一つとして鑑賞することもありませんでした。
　ところが、あの世とこの世の境から戻ってきたとき、突然芸術に対する思いがわき起こったのです。まるで木が雷に打たれたようなものでした。この衝撃的な体験で、私はめくるめく気分で、すべてが新しくすばらしく感じられ、人生がすっかり変わってしまったのです。いったい私の手を動かしているのは誰なのか？　こうした不思議な感覚が宿ったことに、当初は色々と考えたものです。しばらくたった今では、〈その人〉が誰なのか、だいたいの見当はついています。さまざまな不思議なことがその後も次々と起こったのでね」
　幸せいっぱいの表情で一生懸命に話し続けるリグストロ氏は、なぜかあの北斎に非常に似ている。肩までかかる白髪。黒い穏やかな瞳。
　自分の身に起こった数々の体験を話してくれるのだが、できるだけ説明が大げさにならないようにつとめている様子。それは超心理現象といってもいい体験だった。
　不思議なエピソードの発端は、心臓麻痺で倒れた瞬間にさかのぼる。
「あの時も私はここに座っていました。突然、冷や汗が流れ出て全身の力が抜けていくのが判りました。そばにいた従業員に、〈医者を頼む。気分が悪い〉と言って、そのまま床に倒れました。まさにその瞬間、入り口から医者が入ってきたのです。彼は長年の友人で、時々うちへ遊びに来ていたのですが、折しもその日、その瞬間にやってきたのでした。彼があのとき来ていなかったら、私は助かっていなかったでしょう。偶然だろうって？　たしかにそうかもしれません。でも私の二度目の人生は、そうした〈偶然〉の連続なのです。
　意識が戻ったのは四日後でした。〈意識が戻った〉という表現は正確ではありません。臨床学的には私は危篤状態でした。ですが、病室で何が起きているかはすべてはっきりとわかっていたのです。あの〈危篤状態〉の四日間は、まさに至福の日々でした。幸せな気分で、今までに一度も、そしてこれからも決して味わうことのないピュアな幸福感でした。言葉では表せません。赤ん坊が訳もなくにこにこと笑うことがあるでしょう。ああいう充足感です。医者が次々と点滴や管を私のからだに装着するのを感じながら、そっとしておいてくれないかと願っていたほどでした」
　懸命の看護の甲斐あって、リグストロ氏は一命を取り留めた。だが、この世に戻ってきたのは病に倒れる前とは別人のリグストロ氏だった。治癒した、というより生まれ変わった、と言った方がいいかもしれない。しかも偉大な芸術家として。
　生還したリグストロ氏は、憑かれたように芸術にのめり込んでいく。絵のレッスンも受けるようになるが、最初の習作からその非凡な才能に教師は舌を巻いた。誰にも手ほどきを受けていないのに、まるで何年も前から絵に親しんでいたかのように、色付けを、色作りを手際よく行うのだった。
「色に強烈な魅力を感じたのです」当時を思い出して、ひどく感慨深げに彼は言う。
「デッサン力も磨かなければという願望にかられて、手当たり次第に本を買いあさり、息つく間もなく読みふけりました。読んだ本に出てくる絵は、すべて頭に鮮明に残り、そのどの絵もいとも簡単に描き起こすことができました。もう以前からよく知っているものをさらう、という感覚でした。実際、創作をしていて疑問が生じたとき、参考になる本を〈探しに行く〉というより〈取りに行く〉という感じでした。誰に訊かなくても、求めている本がどこにあるかがいつもすぐに思い浮かぶのです。私の住んでいる町だけでなく、それがどの町の、どの本屋の、どの棚にあるのかまで、目に浮かんでくるんです。ときどき電話や手紙で遠く離れた書店に注文を出しますが、よくそこの店員から〈何時間もかけて調べたが、店内にも取り次ぎにも該当書はない〉と謝りの返事があります。私には見えるので、〈ほらでもそこをごらんなさい。あるでしょう？〉と再度注文すると、本当にそのとおりのところに私の欲しい本があるのです。行ったこともない書店でもそうです。まるで誰かが私を導いているようでしょう？
　またあるときは画材屋の前を通りかかり、竹の管のようなものを見つけました。見たこともないものでした。何に使うかはさっぱり判らなかったけれど、どうにもおさえきれず、三、四本購入しました。店員に訊ねると、デッサン用竹製のペンだという。うれしくなって、〈じゃあ私も試してみよう〉というと、その店員はちょっと皮肉っぽく、〈どんな材料にも慣れていて相当の技術を習得している人ですら、このペンは使いこなすのが難しいので

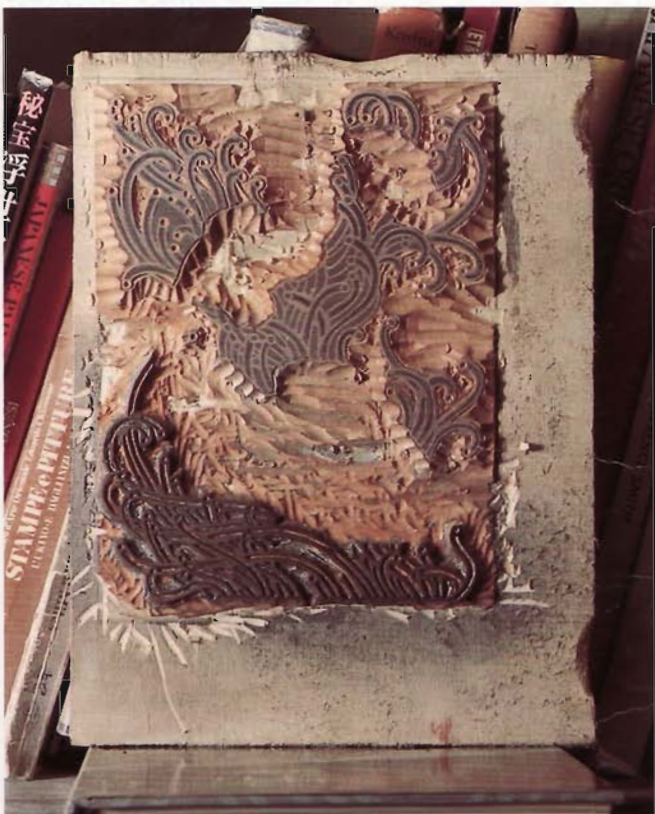
ばれんはインド製のコップ敷きをほどいて作ったという。

HOKUSAI
A Reincarnation in Genova

穴蔵のようなアトリエで彼はひとり朝から晩まで1日14時間作品を作り続けていた。

道で拾った新聞からインスピレーションを得て作ったリンゼイ・ケンプの肖像画。

自分で考案した様々な道具と初期の墨絵の作品。

いろんな物がひしめきあっている色付け、色合わせの作業台。

誰に教えられるでもなく、自身で技術を学んだ。

漢字やひらがなは近所に住む日本人に教えてもらった。

すよ。初心者のお客さんに使えるかどうか〉と忠告してくれたのでした。
アトリエに戻って、その竹ペンをインクに浸したとたん、何の迷いもなく手はかってに動きだし、菊の花、猫、にわとり、竹林を何十枚も描き出したのでした。題材はすべて東洋画の代表的なものばかりでした。出来はどれもすばらしく、我ながら感心するやらびっくりするやらでした」
この竹ペンとの出会いで、リグストロ氏は自分の芸術的使命が何なのかを悟ったのである。それは、まさに日本美術だった。日本美術に関する興味がわき起こり、懸命に勉強を始める。どの本を見ても読んでも、そこで目にするものは全て以前から知っていることのような気がしたという。ごく短期間で、数多くの手法の秘訣を解きあかし、習得。手漉きの和紙、約二百八十種類を見分け、言い当てるほどになった。実際、私たちの目の前でも、数十の和紙に目を閉じたまま触れ、〈これはミノテングジョウで、着物を保管するために使われるもの。これはトスキ。これはスミナガシの柄入りだ〉という具合にあてて、それは少しの迷いも間違いもない。
リグストロ氏は日本語を話さない。しかし、美術の専門用語や地名、人物名を間違えることもなくすらすらと口にする。日本人でもこうはいかないかもしれない。それだけでなく、日本の美術史、文学史、歴史を熟知していて、たくみに解説するのである。いったいこれだけの知識を驚くほどの短期間に、どうやって習得したのだろうか。しかもたった一人で。以前には、文学も歴史も芸術も勉強をしたことがなかったというのに、だ。
「私はまるでブルドーザーのようでした」
習作や作品の数の多さに圧倒されている私たちを見て笑いながら彼は言う。
「どんなに難しい技術的な問題につきあたっても、翌日にはいとも簡単に解決できました。複雑な製法の和紙も自分で創ることができました。次々と読む本からは、芸術と歴史、禅を学ぼうとしたのです。まるで熱にうかされているようでした。
先に進めば進むほど、日本美術に惹かれていくのがよくわかりました。理由はよく分からないままです。そしてまたもやそこで、不思議なことが起きたのです。どういうわけか妻の親戚のもとに〈The Studio〉という貴重な雑誌があって、それが私の手元に回ってきました。この雑誌は、ロンドンで半世紀ほど前に刊行されたもので、その号には版画の特集が組んであったのです。
再度、雷に打たれたような衝撃でした。木製の版に絵を描き、彫り、刷る。まさしく私が探していたものでした。それまで何を求めていたのか自分でもよく分からなかったのに、まるで目からうろこがおちたように、これだ、とすべてが明らかになったのです」
リグストロ氏は、全身全霊、その全ての創造力を傾けて版画に打ち込むようになる。何百枚もの版を彫った。柘植(つげ)、胡桃(くるみ)、林檎、そして桜。古の日本人画家達が使用した、ばれんや三角刀など日本独特の道具を自分で作り出しながら。
リグストロ氏は、北斎に自分を導くものを感じとり、これが自分の師だ、と信じた。十九世紀に生きた版画の巨匠についていくと決めたのだ。
非常に貴重な金箔やラピスラズリなども使いこなすようになっていく。ウルシと混ぜながら。
「そうそう、このウルシですがね、これもまた説明のつかない不思議な体験でした。古の日本の巨匠たちが、色粉をまぜるのに西洋では手に入らない何か特殊な液体をのばして混ぜ合わせていたらしいことは分かっていました。それがどうやらウルシだったらしいことがわかりました。その木は残念ながら、ヨーロッパでは育ちません。このウルシなしに日本の師匠のレベルに追いつこうとするのは、不可能です。ある朝のことです。私はここに座って、何とかこのウルシに代わる方法がないかと頭をひねっていました。そこへ港から知人の船員がやってきて、〈おい、ジョヴァンニ、化学に明るいと聞いているが、ちょっと手を貸してくれないか。港に日本から船がついて、何だか得体の知れない白いものが荷のなかにあるのだが、税関でもその正体がわからなくて困っているんだよ〉。船員の言うことを聞いて、私の心臓は口から飛び出すのではないかと思いました。私にはもう、その白い物体の正体がわかっていました。港に行って、この目でたしかにそれが思った通り、ウルシであることを確認したのです。大変な量でした。そして宛先は、不明！　私は大急ぎで、税関で必要な手続きと支払いをすませて、倉庫に運び込んだのでした。いまだにこの時のウルシを創作に使っているのです。日本から遠く離れた、地図にも出ていない港町についたウルシ。これもやはり偶然とおっしゃいますか？」

彼の得意の色は地中海の青。何の道具か分からずに購入した竹ペン。

HOKUSAI
A Reincarnation in Genova

竹ペンをインクに浸したとたん、何の迷いもなく手はかってに動きだし、菊の花や竹林を描き出した。

もう誰にも彼をとめることはできない。次から次へと色刷りの版画は生み出されて、そのどれもが傑作なのである。北斎の国、ニッポンではすでに忘れ去られた技とスタイルが、時と場所をへだててイタリアに忽然とよみがえったのである。

　リグストロ氏は北斎の人生とその芸術を熟知している。それを私たちに教え諭す、という感じではなく、彼の口を通して北斎が語っているかのよう。その表情は偉大な巨匠そのもので、確かにイタリア人なのにすっかり日本人のような顔つきになっていて驚かされる。

「北斎の人生は波瀾万丈で、名前と芸風を五十四回も変え、家は九十二回も代えています。彼の九十三軒目の家が、この私の身体だったと考えるのは変でしょうか？　私の絵は、北斎の物と違って色が深く錯綜しています。これは、もしかして彼の五十五番目の作風ではないのでしょうか。私の名前も、彼の五十五番目の名前とは考えられませんか？　六十歳のときに北斎も心臓発作に襲われています。治療に彼は、日本の伝統的な処方を使いました。柑橘類を木製のナイフで細かく切り、土鍋に入れた日本酒で煮込み、その煮汁を何回にも分けて四十八時間内に服用したのです」

　彼は滔々と話し続ける。まるで親戚のおじさんのことを思い出すかのように。

「講演の依頼も受けます。そういうとき、私はとりわけ準備もせずに出かけ、話をします。私の口と手は、私から離れてひとりでに動きだすかのような感じです。私は、自分が何を教えるつもりなのか、話すつもりなのかさっぱり知らないのです。ところがいったん話し始めると、専門家でも話さないようなとても面白い話ができてしまって。本で読んだ内容でもないのです。身体の中からわき起こってくる感じでね。不思議です。

　私は、北斎のまねはしません。私の使う色は、彼のものより暖色で地中海の色です。もちろん、やってみろ、と言われたら、日本の画家達の手法をまねることはわけないです。写楽の作風だって、できます。専門家でもわからないでしょう。でもそういうものを創っても何の役にも立ちませんから。リプロダクツして売れば、という人もいますが、私は自分の作品を売る気はまったくないのです」

　さて、専門家は実のところ、このミステリアスな芸術家をどう評価しているのだろうか。

　イタリアの美術専門誌は、リグストロ氏のことを紹介する記事の中で、〈ヨーロッパで最高の〝刷り物〟と〝錦絵〟の作家であり、発祥の地である日本でさえ忘れ去られてしまった版画の手法を熟知している〉とする。

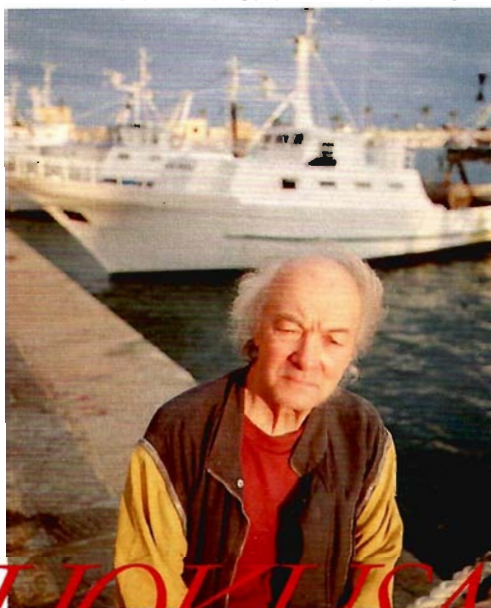
　一九九一年六月に美術評論家の福田和彦氏がはじめて彼のアトリエを訪れたとき、〈小さく不思議な竹製の器を開く様な印象がした。そこには地中海の明るい太陽の日差しがさし込み、夢幻の版画の色達が歌い、踊っていた。黄金、銀、赤、青、緑の色が互いにうまく錯綜しあっている〉と、イタリアの芸術がそこまで高いレベルに到達したことに驚き、こうも書き記している。〈木版画は国境を越えて、リグストロの手を得て、新しい息吹を吹き込まれたのである。……リグストロの版画は詩的な世界だ。そこではミューズがハープを奏でている。この純粋な美しさに酔いしれるのは、私だけではないはずである〉

　同様に、ジャック・ヒラー氏（ロンドンのサザビーズの日本美術専門の評論家）も賞賛してやまない。〈彼の才能は、まず何より木の版に彫り込む手法のレベルの高さにある。誰にもそれを抜くことができないだろう。さらに、それを紙にうまく刷り上げる腕は、一六〇〇―一八〇〇年代日本の刷り物師と同様のレベルである〉とも述べている。

　ヴェネツィア大学の美術史専門のカルツァ教授は、美術史を専攻する自分の教え子をリグストロ氏のもとへ送り込んでいる。日本の錦絵の技術の秘訣を学ばせるためだ。

　ある日、道を歩いていたリグストロ氏は古新聞に目をとめた。そこには和服の舞台衣装をまとったリンゼイ・ケンプの写真があった。惹かれるものがあって、彼はそれを彫る。大変すばらしい出来だった。人づてにそれがケンプの手に渡り、彼はリグストロの作品にぞっこん惚れ込み、その肖像版画を部屋に飾っているという。その版画の脇には、リグストロ氏がケンプのために書いた詩も彫られている。その詩は、リグストロ氏自身を紹介するにもふさわしい内容だ。

あなたは幽霊か？
あなたは溜息か？
あなたは上空から落ちてきた流れ星か？
あなたはさまよう魂か？
花のように存在するのか？
それとも踊る詩人か？
あなたは流れる雲なのか？
ジョヴァンニ・リグストロ・ベリオ、不思議で魅力的な詩人で画家。一体、彼は誰なのか？ M

自宅そばの港で。ここに宛て先不明のウルシが荷揚げされた。

HOKUSAI
A Reincarnation in Genova

イタリアの美術専門誌は彼のことを「ヨーロッパで最高の〝刷り物〟と〝錦絵〟の作家」と評している。

アトリエの隅に隠すようにして置いてあった「春画」。

DA PAG. 76 DELLA RIVISTA " MARCO POLO TOKYO

Una delle più grandi scoperte del secolo!

Una straordinaria esperienza in fin di vita.

IL GENIALE STAMPATORE DI UKIYO-E DI GENOVA È LA REINCARNAZIONE DI HOKUSAI!

Un perito chimico specializzato nella produzione dell'olio, privo d'interesse per l'arte e di talento per la pittura viene colpito da un infarto ed è in pericolo di vita. Sulla soglia della morte compie un'esperienza straordinaria, rivive e scopre di possedere un inusitato talento artistico.

Quasi guidato da una misteriosa presenza s'immerge nel mondo delle stampe. Possiede in modo stupefacente la tecnica di un grande maestro giapponese di due secoli fa.

Protagonista di questa storia è un settantenne, Giovanni Ligustro Berio.

Appresa la singolare notizia mi recai nello studio di Ligustro, situato nella zona portuale di una città a Nord di Genova.Era al pianterreno di una casa, in una stradina. A prima vista pareva una bottega di un falegname o di un calzolaio.Nello studio, che non misurava più di una decina di metri quadri, erano accumulate alte pile di materiali e di opere. di tavolette incise e di carte giapponesi, a tal punto che quasi mancava lo spazio per muoversi. In questa sorta di tana egli si dedicava alle sue creazioni dal mattino alla sera, per quattordici ore al giorno.

"Come può constatare ora dispongo di una montagna di libri e di materiale di documentazione, ma quando iniziai a sentire un irrefrenabile desiderio di dipingere non avevo neppure un libro d'arte. Avevo tuttavia l'impressione che "qualcuno" guidasse la mia mano.Sentivo che "qualcuno" dentro me stava usandomi come uno strumento.

Dopo il risveglio dallo stato comatoso in cui ero precipitato a causa della paralisi cardiaca, presi in mano la penna e disegnai una figura dopo l'altra, con estrema facilità e rapidità, quasi fossi stato un autentico artista. Medici, familiari e amici guardavano stupiti...Ma il più sbalordito ero io. Fino a quel momento non avevo mai pensato all'arte.Ero persino alieno alle visite ai musei e alle chiese, che reputavo un inutile sperpero di tempo.

A causa della guerra non ero riuscito a completare gli studi e nei cinquant'anni intercorsi fino al giorno dell'infarto mi ero dedicato soltanto al lavoro.Viaggiavo senza sosta in tutta la nazione per svolgere la mia attività di perito chimico nel campo della produzione dell'olio di oliva.Come

è noto, strade e piazze d'Italia sono ricche di opere d'arte.meravigliose. Ma pur avendo la possibilità di ammirarle non ne apprezzai mai neppure una.

Quando tornai dal confine tra il mondo terreno e quello ultraterreno sorse in me un improvviso interesse per l'arte.Ero come un albero colpito da un fulmine. Fu un impulso: provai un senso di vertigine, tutto mi apparve nuovo e meraviglioso, la mia vita cambiò completamente.Chi guidava la mia mano? In quel momento azzardai diverse supposizioni. Ora, a distanza di tempo, presumo di sapere chi sia. Strani eventi accaddero in seguito, numerose volte."

Osservo Ligustro mentre parla con fervore e con un'espressione di radiosa felicità: somiglia straordinariamente a Hokusai. Lunghi capelli candidi.Nere pupille, sguardo sereno.

Racconta le sue numerose esperienze cercando di evitare qualsiasi esagerazione.Esperienze che potrebbero essere definite paranormali.

Strani episodi che ebbero inizio nell'attimo in cui fu colpito dall'infarto.

"Anche allora ero seduto qui. D'un tratto sudai- un sudore freddo- e sentii che ogni forza mi abbandonava. Dissi a un mio dipendente: "Chiama un medico. Sto male." e caddi a terra. Proprio in quell'istante entrò un medico. Era un vecchio amico che veniva di tanto in tanto a trovarmi. Arrivava al momento giusto.Se non fosse sopraggiunto non sarei sopravvissuto.Un semplice caso? E' possibile. Ma la mia seconda vita è una continua successione di simili"casi".

Mi risvegliai dopo quattro giorni.Non sarebbe esatto dire che "tornai cosciente". Clinicamente ero stato in agonia. Eppure non avevo mai perso la coscienza di ciò che accadeva intorno a me.Quei quattro giorni di "stato comatoso" furono un paradiso per me.Una sensazione di gioia, una purissima felicità mai provata fino ad allora, che mai più proverò.Indefinibile. Un senso di appagamento. Come quello di un neonato che sorride senza motivo apparente.Avrei persino voluto che i medici mi lasciassero tranquillo, senza più applicarmi flebo e tubicini, di cui ero cosciente."

Grazie alle intense cure mediche Ligustro si salvò. Ma a tornare in questo mondo fu un Ligustro differente dall'uomo di un tempo.Più che "guarito" era "rinato".Oltretutto come grande artista.

Il "rinato" Ligustro si dedicò anima e corpo all'arte, come un invasato.

Prese anche lezioni di pittura e il maestro fu stupito dall'eccezionale talento rivelato dai suoi primi esercizi. Sebbene nessuno l'avesse ancora istruito maneggiava i colori e li sfumava come un provetto artista, abituato a dipingere da lunghi anni.

"Ero intensamente attratto dal fascino dei colori." ricordò con profonda emozione Ligustro." Desideravo perfezionare la mia capacità di disegnare, feci dunque incetta di libri e li lessi avidamente. Mi rimanevano impresse nella mente tutte le illustrazioni e potevo riprodurle a memoria disegnandole con estrema facilità. Avevo l'impressione di ritrovare qualcosa che conoscevo bene. In realtà,quando durante un atto di creazione artistica mi sorgeva un dubbio, più che a "cercare" andavo a "prendere" il libro da consultare. Senza domandare a nessuno sapevo subito dove trovare il libro desiderato. Vedevo in quale città, in quale libreria, persino su quale mensola fosse collocato.Talvolta ordinavo un libro con una telefonata o una lettera a una libreria lontana e mi veniva risposto con rammmarico : "l'abbiamo cercato per ore ma non è né in negozio né in deposito". Ma io lo vedevo e insistevo: "Guardate là. C'è, vero?" E il mio libro era veramente nel luogo che avevo indicato. Accadeva anche nelle librerie in cui non mi ero mai recato. Come se qualcuno mi avesse guidato, non vi pare?"

Un giorno passando davanti a un negozio che vendeva colori e pennelli notai una sorta di tubo di bambù. Un oggetto mai veduto. Ignoravo a che cosa servisse, ma non seppi resistere alla tentazione di acquistarlo. Ne comprai tre o quattro.Il commesso mi spiegò che era una penna di bambù per tracciare disegni. "Bene, allora proverò anch'io." dissi; il commesso replicò: "Ha difficoltà ad usarla anche chi conosce ogni tipo di materiale e possiede una tecnica notevole. Dubito che un dilettante possa servirsene."

Tornato al mio studio immersi la punta della penna nell'inchiostro e subito la mano mi si mosse e senza alcuna esitazione riempii decine di fogli con disegni di crisantemi, gatti, galline, boschetti di bambù. I soggetti più caratteristici della pittura orientale. Li avevo tracciati con straordinaria bravura che mi lusingava e mi stupiva."

La penna di bambù rivelò a Ligustro quale fosse la propria missione artistica. L'arte giapponese. L'interesse per l'arte giapponese lo indusse a iniziare uno strenuo studio. Qualsiasi libro sfogliasse o leggesse aveva l'impressione di avere già visto e conosciuto tutto. In breve tempo apprese

numerose tecniche decifrandone i segreti. Poteva distinguere duecento ottanta tipi di carta giapponese fabbricata a mano. Sottoposi al suo esame decine di carte giapponesi che egli osservò e sfiorò con le dita, quindi, senza alcuna esitazione, ne individuò i nomi: "questa è una minotengujō, è usata per avvolgere i kimono da riporre, quella è una tosuki, quest'altra è una suminagashi con motivi"

Ligustro non parla il giapponese.Ma cita con la massima facilità e con precisione termini tecnici concernenti l'arte giapponese, nomi di luoghi e di persone. Ostici persino ad un giapponese. Inoltre mostra una profonda conoscenza della storia, dell'arte, della letteratura del Giappone, e ne disserta con prodigioso talento. Come avrà potuto acquisire un tale patrimonio culturale in un tempo così sorprendentemente breve? Autodidatta. Senza aver mai, prima di allora, studiato letteratura, storia o arte.

"Sono stato un bulldozer" mi confidò ridendo Ligustro notando lo stupore per l'impressionante mole di prove d'autore e di opere. "Per quanto ardui fossero i problemi tecnici in cui mi imbattevo, il giorno seguente riuscivo a risolverli con estrema facilità. Riuscivo persino a fabbricare da solo carte giapponesi che esigevano complessi procedimenti. Divoravo libri uno dopo l'altro studiando arte, storia, zen. Era quasi una febbre.

Più progredivo e più mi sentivo affascinato dall'arte giapponese.Non ne capivo la ragione.Accadde allora un fatto strano. Un parente di mia moglie ebbe fra le mani una preziosa rivista "The Studio" e me la passò. Era stata stampata a Londra mezzo secolo fa e conteneva un inserto speciale sulle stampe. Fu un nuovo colpo di fulmine. Dipingere su una tavoletta, incidere, stampare. Avevo trovato. Sapevo ormai esattamente che cosa stessi inconsciamente cercando."

Ligustro si dedicò anima e corpo con tutta la sua creatività alla xilografia. Incise centinaia di tavolette.Di bosso, di noce, di melo, di ciliegio. Si fabbricò scalpelli triangolari e sgorbie simili a quelli usati dagli antichi artisti giapponesi.

Ligustro intuiva che era Hokusai a guidarlo e l'aveva eletto a maestro. Decise di seguire le orme del grande artista vissuto nel diciannovesimo secolo.

Incominciò a familiarizzarsi con l'uso di preziosi fogli d'oro e di lapislazzuli. Mescolati con lacca.

"Già, la lacca... un'altra inspiegabile, strana esperienza. Sapevo che gli antichi artisti giapponesi diluivano i colori con un liquido speciale, introvabile in occidente. Compresi infine che era lacca. Purtroppo è un albero che non cresce in Europa. Sarebbe stato impossibile raggiungere senza il suo ausilio il livello dei maestri giapponesi. Accadde un mattino. Ero seduto qui e mi arrovellavo nel tentativo di trovare un surrogato della lacca. Entrò un conoscente, un marinaio che veniva dal porto: "Ehi, Giovanni! So che sei un esperto di chimica.Aiutaci. Abbiamo in porto una nave giapponese con nel carico uno strano materiale bianco.Alla dogana non capiscono che cosa sia." Alle parole del marinaio mi sentii il cuore in gola. Intuivo quale fosse il materiale bianco.Mi precipitai al porto e constatai che si trattava proprio di lacca. Una grossa quantità.E si ignorava a chi fosse destinato! Svolsi il mio piano espletando in fretta le pratiche doganali e dopo aver pagato trasportai la lacca in un magazzino. Uso ancora quella lacca per le mie creazioni. Una lacca approdata in un porto che su molte carte non è neppure segnato, lontano dal Giappone. Anche questo un semplice caso?"

Ormai nessuno avrebbe potuto fermarlo.Nascevano una dopo l'altra incisioni a colori, e tutte erano capolavori.Tecniche e stili ormai dimenticati in Giappone, il Paese di Hokusai, rivivevano all'imrovviso in Italia, lontano nello spazio e nel tempo.

Ligustro conosce nei minimi particolari la vita e le opere di Hokusai. Quando ne parla non si limita a dissertarne, pare che per bocca sua sia Hokusai stesso a raccontare. L'espressione del suo volto è quella del famoso artista , sebbene Ligustro sia incontestabilmente italiano le sue fattezze assumono sorprendenti tratti orientali.

"La vita di Hokusai fu densa di vicissitudini, mutò nome e stile artistico cinquantaquattro volte, cambiò abitazione novantadue volte.Le sembra strano che io reputi il mio corpo la sua novantatreesima casa? Nelle mie stampe i colori sono più intensi e complessi di quelli di Hokusai. Forse questo è il suo cinquantacinquesimo stile pittorico.E Ligustro non sarà il suo cinquantacinquesimo nome? Anche Hokusai fu colpito da un infarto a sessant'anni.Si curò con una ricetta tradizionale. Agrumi sminuzzati con un coltello di legno, bolliti con sake in un recipiente di terracotta; una bevanda che sorseggiò numerose volte durante quarantotto ore."

Ligustro parlava con entusiasmo. Quasi ricordasse episodi della vita di un parente.

"Mi chiedono anche di tenere conferenze. Mi presento senza aver preparato alcun discorso e parlo. Ho l'impressione che bocca e mani si muovano indipendentemente dalla mia volontà. Ignoro l'argomento che sto per affrontare. Ma iniziato il discorso narro storie molto interessanti, soggetti che neppure uno specialista saprebbe trattare.Non sono un retaggio delle mie letture. E' come se scaturissero dal mio intimo. Strano.

Non imito Hokusai. I miei colori sono mediterranei, più caldi dei suoi. Potrei naturalmente cimentarmi con facilità nell'imitazione delle tecniche dei pittori giapponesi.Potrei creare stampe con lo stile di Sharaku. Che neppure uno specialista distinguerebbe.Ma che senso avrebbe? Potresti riprodurle in serie e venderle - mi dicono. Ma io non ho alcuna intenzione di vendere le mie opere.

Ma come giudicano gli esperti questo artista così misterioso?

Una rivista d'arte italiana dedica a Ligustro un articolo e lo definisce "autore dei più stupendi surimono e nishiki-e d'Europa, profondo conoscitore di tecniche d'incisione dimenticate persino nel paese d'origine, il Giappone."

Il critico d'arte Kazuhiko Fukuda visitò lo studio di Ligustro nel giugno del I99I :" Avevo l'impressione di aprire un piccolo, misterioso contenitore di bambù, in cui filtravano i luminosi raggi del sole mediterraneo e i colori di fantastiche stampe cantavano e danzavano. Ori, argenti, rossi, azzurri, verdi si mescolavano mirabilmente." Stupito dall'alto livello raggiunto dall'arte italiana aggiunse: " Grazie alla mano di Ligustro un nuovo spirito anima le stampe, che varcano ormai i confini della terra d'origine. ...Le incisioni di Ligustro creano un mondo di poesia. Ove le Muse suonano l'arpa.Non sono certamente il solo ad inebriarmi di una così pura bellezza."

Nello stesso modo anche Jack Hillier, esperto d'arte giapponese presso la casa d'aste Sotheby's di Londra, è prodigo di lodi: "Il suo genio si manifesta soprattutto nell'alto livello raggiunto nella tecnica d'incisione. L'abilità con cui applica la carta da stampare emula il talento degli artisti giapponesi dal milleseicento al milleottocento."

Il professor Calza, studioso di storia dell'arte e docente all'Università di Venezia invia a Ligustro i propri allievi. Affinché insegni loro i

segreti della tecnica del nishiki-e.

Un giorno, camminando per strada, Ligustro notò un vecchio giornale. Vide la fotografia di Lindsay Kemp con indosso un kimono di scena. Ne fu attratto e ne riprodusse l'immagine in un'incisione. Un'opera meravigliosa. Passò di mano in mano fino a Kemp, il quale, affascinato dalla creatività di Ligustro appese nella propria camera quel ritratto, con a lato una poesia che Ligustro dedicava a Kemp .Versi che mi paiono adatti a presentare Ligustro :

" Sei un fantasma?
Un sospiro?
Una stella caduta dal cielo?
Uno spirito vagante?
Esisti come fiore?
O sei un poeta che danza?
Una nuvola che corre?

Giovanni Ligustro Berio, uno strano, affascinante poeta e pittore. Chi sarà realmente?

TRADUZIONE DIDASCALIE

Il geniale incisore di Genova e' una incarnazione di Hokusai Pag. 76
(Indice)

Pag.76 foto piccola: Le fattezze di Ligustro ricordano un volto orientale. La somiglianza appare evidente se la si confronta con il ritratto di Hokusai conservato nel Museo delle stampe Giapponesi della citta' di Matsumoto.

Pag.78 foto piccola: Dal mattino alla sera lavora per 14 ore nel suo studio. Pare che abbia ricavato un utensile da un sottobicchiere Indiano per fare il "BAREN".

Pag.79 foto grande, didascalia in alto a sinistra: Ritratto di Lindey Kemp un'idea tratta da una illustrazione di un giornale raccolto per strada.

Pag.80 foto in alto a sinistra: I vari strumenti adoperati dal maestro e i primi disegni ad inchiostro (SUMI-E).

foto in alto a destra: Il tavolo in cui il maestro mischia e prepara i colori e li applica stipato di oggetti.

foto in basso a sinistra: Apprese la tecnica da solo senza alcun maestro.

foto in basso a destra: Ideogrammi di HIRAGANA gli furono insegnati da una Giapponese che vive nelle vicinanze.

Pag.81 Nell'attenzione immerse la punta della penna di bambu' nell'inchiostro:la sua mano si mosse senza alcuna esitazione e disegno' fiori di crisantemo e boschetti di bambu'.

Pag.82 foto piccola: Al porto vicino alla sua casa vi fu portata una lacca destinata ad una persona conosciuta. Una rivista d'arte Italiana lo definisce - Autore delle piu' stupende NISHIKI-E e SURIMONO di tutta Europa.

Pag.83 foto grande, didascalia in alto a destra: Una SHUNGA quasi nascosta in un angolo dello studio.